

## 北海道大学 入試問題の利用について

北海道大学学務部入試課

本学では、入試問題の利用については特に制限を設けておりませんが、以下の条件に留意の上、適切にご使用願います。

- ① 本学入試問題の著作権は、北海道大学に帰属します。
- ② 入試問題を利用する団体等が、出典を明示すること、責任の所在を明確にすることが必要です。
- ③ 本学試験問題を原本どおり使用できない場合には、改変したことを必ず明示願います。
- ④ 二次利用する場合において、問題に引用されている作品等がある場合には、使用する団体等が責任をもって、本学に対してではなくそれぞれの著作権者（作品の著者等）に対して、著作権処理を行っていただく必要があります。
- ⑤ 解答・解説等を独自に作成・掲載するに当たっては、閲覧される方が「本学が公表している解答例・解説」と誤解してしまうことがないように、掲載方法等についてご配慮願います。

### 【問い合わせ先】

北海道大学学務部入試課

〒060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目

TEL : 011-706-7484 FAX : 011-706-7488

# 小 論 文

(教育学部)

9 : 30 ~ 12 : 30

## 解 答 上 の 注 意

1. 試験開始の合図があるまで、この問題紙を開いてはならない。
2. 問題紙は 24 ページある。
3. 解答用紙は
 

|         |
|---------|
| 解答用紙番号  |
| 小論文 0—1 |

 , 
 

|         |
|---------|
| 解答用紙番号  |
| 小論文 0—2 |

 , 
 

|         |
|---------|
| 解答用紙番号  |
| 小論文 0—3 |

 , 
 

|         |
|---------|
| 解答用紙番号  |
| 小論文 0—4 |

 の 4 枚である。
4. 解答用紙は 4 枚とも必ず提出せよ。
5. 受験番号および座席番号(上下 2 箇所)は、監督者の指示に従って、すべての解答用紙の指定された箇所に必ず記入せよ。
6. 解答はすべて解答用紙の指定された欄に記入せよ。
7. 必要以外のことを解答用紙に書いてはならない。
8. 問題紙の余白は下書きに使用してもさしつかえない。
9. 下書き用紙は回収しない。

- 1 以下の文章は、前田健太郎『女性のいない民主主義』(岩波書店, 2019 年)を一部改変したものである。これを読んで、以下の問に答えなさい。

問 1 下線 1 に関して、一般的な政治学の教科書では、なぜ男女の不平等が見えにくいのか。その理由を、本文に即して 200 字以内で説明しなさい。

問 2 著者は下線 2「ジェンダーの視点から眺めることで、世界の見え方がこれほど変わるのならば、そのことを最初から知っておきたかった」と述べている。この主張に関して、教育学(教育に関する事象)をジェンダーの視点で眺めると、どのような気づきが得られると考えられるか。800 字以内で論じなさい。

日本列島に暮らす多くの人にとって、政治とは永田町にある国会議事堂で起きている出来事を指すのではないだろうか。試みに、この建物の内部の風景を思い浮かべてみよう。そこでは、首相が演説していることもあれば、野党の議員が大臣の不手際を追及していることもあるだろう。大臣が答弁に窮した時には、後ろに控えている官僚が、そっと何かを耳打ちしている場面もあるかもしれない。

ここで、少し思い返してみてほしい。今、頭に浮かんだ風景の中に、女性は何人いただろうか。おそらく、登場人物のほぼ全員が、スーツ姿の男性だったのではないだろうか。

このイメージこそ、日本の政治の特徴を端的に表している。日本では、政治家や高級官僚のほとんどを男性が占めており、女性で権力者と呼ばれるような人はほとんどいない。

これは、実に不思議なことではないだろうか。一般に、日本はデモクラシー、すなわち民主主義の国であるとされている。古代ギリシャに由来するこの言葉は、もともと「人民の支配」という意味を持っていた。その時代には、人民といえば男性のことを指していたが、今日では、人民の中には男性もいれば女性もいる。このことを素直に受け止めれば、民主主義の国では男性と女性が共に政治に携わるはずであろう。ところが、日本では男性の手に圧倒的に政治権力が集中し

ている。具体的なデータについては後述していくが、このような国は、他にあまり見かけない。日本の民主主義は、いわば「女性のいない民主主義」なのである。

なぜ、民主国家であるはずの日本で、男性の支配が行われているのだろうか。他の国は、なぜ日本のようにならなかったのだろうか。日本では、女性が権力を握ることを特に難しくするような要因が、何らかの形で働いているのだろうか。様々な疑問が湧いてくる。

この問題について考えていくうちに、さらなる疑問に突き当たる。そもそも、男性の支配が行われているにもかかわらず、この日本という国が民主主義の国だとされているのは、なぜなのだろうか。日本の政治体制を民主主義と呼んでいるのは、政治家やジャーナリストだけではない。政治について考えることを生業とする政治学者も、日本が民主主義国であるという認識をおおむね共有している。

これは、政治学という学問の性格に関わる問題であろう。どうやら、筆者も含めた多くの政治学者は、女性がいない政治の世界に慣れきってしまっていたようだ。少なくとも、民主主義という言葉が、男女の地位が著しく不平等な政治体制を指す言葉として使われていても、あまり気にならなくなってしまう。その結果、何か重要なものが見えなくなっているのかもしれない。もし、政治学を別の視点から捉えなおせば、政治そのものも全く違った形で見えてくるのではないだろうか。

通常、政治学の入門書や教科書には、様々な学説が紹介されている。それらの学説の多くは、望ましい政治のあり方を考えることではなく、政治の現状を分析することを目的としている。現状を分析するというのは、例えば次のような問いに答えることを意味する。

- ・ 保守的な有権者とリベラルな有権者の政策的な立場は、どのように異なるのだろうか。
- ・ 現職の候補者は、新人の候補者に比べて選挙に強いのか。
- ・ なぜ、財政再建はなかなか進まないのか。

これらの問いに答えるにあたっては、何をすべきかという価値判断を行うの

ではなく、経験的な証拠を適切な手続きに従って提示することが重視される。このような現状分析を行う政治学を、政治理論や政治思想史などの規範的な命題を扱う分野と区別して、ポリティカル・サイエンス、すなわち「政治の科学」と呼ぶ人もいる。その目的は、政治学から価値判断を排除することで、可能な限り研究者の主観を取り除き、客観的な知識を蓄積することであるとされている。今日、この政治学は、標準的な教科書の記述の大部分を占めており、政治学の「主流派」と呼ばれることもある。

だが、この政治学は、はたして本当に研究者の価値判断とは無縁なのだろうか。例えば、先ほどの三つの問いを、次の三つの問いと見比べていただきたい。

- ・男性の有権者と女性の有権者の政策的な立場は、どのように異なるのだろうか。
- ・男性の候補者は、女性の候補者に比べて選挙に強いのか。
- ・なぜ、仕事と育児の両立支援はなかなか進まないのか。

これらの問いは、いずれも男女の不平等に関わるものだという点だけが、先ほどの問いとは異なっている。それ以外については、大きな違いはない。そうだとすると、これらの問いに答えるには、先ほどの問いと同じように、政治の現状に関する分析を行えば良さそうに見える。

ところが、この種の問題が政治学の教科書において取り上げられることは、ほとんどない<sup>1</sup>。そして、それを研究してきた政治学者がいるということ自体も、世間ではあまり知られていない。もちろん、フェミニズムの政治思想については、聞いたことのある人も多いだろう。だが、それは女性の解放を目指す規範理論であって、政治の現状分析とは関係がないという理解が主流なのではないだろうか。

つまり、政治学の教科書が執筆される時には、収録される学説と、省略される学説がある。その際、男女の不平等に関する学説は、多くの場合、省略される側に含まれてきた。なぜ、そのような形で学説の取捨選択が行われてきたのだろうか。

この問いに対して、フェミニストは明快に答えるであろう。これまで、政治学者の大部分は男性であった。男女の不平等が政治学の教科書に登場しないのは、教科書が男性の視点に基づいて書かれているからである。男性にとって、男女の不平等に関わる問題は優先順位が低い。だからこそ、それに関する研究成果は、政治学の教科書から排除されているのであろう。いくら客観性や価値中立性を持つ「政治の科学」を標榜したとしても、それはいわば「男性の政治学」にすぎないと。

もちろん、ここまで述べてきたような状況は変わってきているという考え方もありうる。というのも、近年の政治学の教科書では、「ジェンダー」というフェミニズムの用語を紹介するものが昔に比べて増えてきた。この概念は、人間の生物学的な性別とは区別された社会的な性別を指し、やや単純化すれば、「男らしさ」や「女らしさ」を意味する。人間の性を二つに区分し、「男とはこういうものだ」「女とはこういうものだ」と考える発想は、人間の生活に大きな影響を与え続けてきた。今日では、ジェンダーの概念を紹介しつつ、社会運動としての第一波・第二波フェミニズムの歴史や、議会における女性の過少代表に関して、一つの章を割いて解説する教科書もある。

だが、この種の教科書では、ジェンダーは「環境」「人権」「民族」などといった項目と並んで、政治的な争点の一種として扱われていることが多い。すなわち、経済政策や安全保障政策などといった伝統的な争点に付け加える形で、ジェンダーに関する問題が、従来とは対立の構図が異なる新たな社会問題の一例として位置付けられているのである。

これに対して、投票行動論や政治体制論など、どのような政治争点にも関係のある一般的な政治の仕組みに関する学説を解説する章では、男女の不平等への言及は行われないのが通例である。そのため、読者は、ジェンダーとは女性にだけ関係のある概念であって、大部分の政治現象とは関係がないかのような印象を抱くかもしれない。

これでは、ジェンダーの概念の持つ切れ味が大きく損なわれてしまう。ジェンダーは、女性を指す概念ではなく、むしろ女性と男性の関係を指す概念だからである。従来、フェミニズムは、一見すると性差別とは無縁な、ジェンダー中立的

に見える社会の仕組みが、実際には男性に有利に働いていることを告発してきた。そうだとすれば、ジェンダーと関係がない問題は、原則として存在しない。近年では、政治学でも「ジェンダーと政治」と呼ばれる研究領域が発展を遂げており、様々な形でジェンダーの概念を用いながら、あらゆる政治現象に切り込んでいる。

その意味において、政治学の教科書がジェンダーを政治争点の一種として取り上げることは、ジェンダーに関する研究成果を十分に生かすことなく、政治学の片隅に隔離することを通じて、男性の政治学を維持する結果をもたらすであろう。

本稿は、この批判を真剣に受け止めることから始めたい。もし、政治学が何らかの意味での客観性を持つ学問を目指すのであれば、それは男性と女性の双方に開かれていなければならないと考えるからである。

そこで、本稿ではジェンダーを、女性に関わる政治争点の一種としてではなく、いかなる政治現象を説明する上でも用いることのできる視点として位置付ける。そして、ジェンダーの視点に基づく議論を、これまでの政治学における標準的な学説と対話させることで、政治の世界がどのように見直されるのかを探る。それは、常に男女の不平等に注意を払いながら政治について考えるということの意味する。

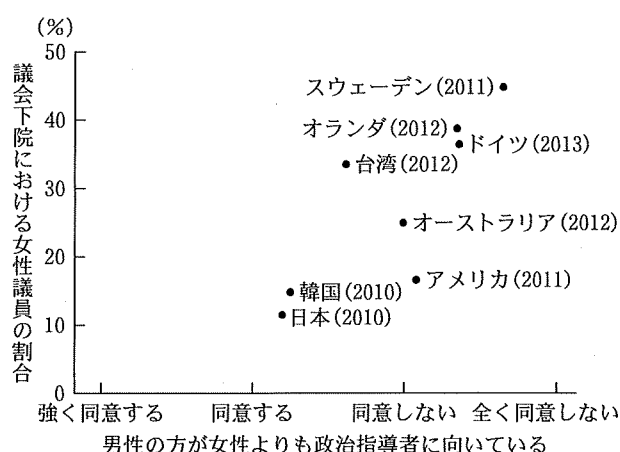
なお、本稿では基本的に男性と女性の関係を扱っているが、ジェンダーをめぐる論点は、これにとどまるものではない。人間の性を男性と女性に二分してしまうと、その枠にはまらない様々な性的少数者の姿が見えなくなってしまう。この点を考慮することで、ジェンダーの概念が切り開く政治学の視野は、今後さらに拡大していくだろう。

〔中略〕

有権者の投票行動の研究は、政治学において統計学的な分析手法の利用が最も進んだ分野の一つであろう。世論調査データを分析した数多くの研究成果が発表され、有権者の非合理性を示す数々の証拠も見つかっている。

ジェンダーの視点から見た場合、有権者の非合理性は、自分が男性であれ女性であれ、政策とは関わりなく男性の候補者に優先的に投票する傾向としてあらわれる。女性は政治に参加するべきではないというジェンダー規範を内面化した有権者は、その候補者が男性であるというだけで、男性の候補者に投票する。女性候補者は、「女性らしい」振る舞いをすれば政治的な能力に欠けると言われ、政治家としてのリーダーシップを発揮しようとすれば「女性らしさに欠ける」と批判される。

この見方に基づいて考えれば、日本の女性議員が少ないのは、日本の有権者が他の国に比べて男性優位のジェンダー規範を強く内面化しているからかもしれない。図は、世界価値観調査(第六波)のデータに基づいて、様々な国における有権者の価値観を比べた上で、同時期の議会下院における女性議員の割合と照らし合わせたものである。横軸には、「男性の方が女性よりも政治指導者に向いている」という考え方に同意するかどうかという質問項目に対する回答の平均値を示し、縦軸には女性議員の割合を示した。この図を見ると、スウェーデンでは、質問項目に全く同意しない有権者が多くを占めるのに対して、日本では同意する有権者と同意しない有権者の割合が大きくは変わらない。つまり、日本では、男性優位主義的なジェンダー規範が強く、それによって女性候補者が不利になっているとも考えられる。



図

ただし、ここで示した世論調査結果の扱いには注意する必要があるだろう。同じ質問項目でも、国ごとの言語や文化の違いによって回答のパターンも異なる。この調査の場合、質問に対して「分からない」と答える回答者の数が、日本は突出して高い。近年では、実験的な手法を用いて有権者のジェンダー・バイアスの強さを測定する研究も盛んに行われているが、質問項目の設定の仕方や調査の実施方法によって、検出されるバイアスの強さは大きく異なる。

いずれにせよ、有権者のジェンダー・バイアスに言及するだけでは、日本の女性議員の少なさは説明できない。2005年に東北大学の研究グループが実施した調査では、日本の平均的な有権者が妥当だと考える女性議員の割合は約33%だという結果が出た。実際の女性議員の割合は、この水準を大きく下回っている。つまり、日本では、有権者が望んでいる以上に、女性議員が誕生しにくい構造が存在しているといえよう。

投票所に足を運ぶ有権者の視点から見た場合、女性の政治家が誕生しない理由は比較的明白であるに違いない。それは、そもそも女性の候補者が少ないことにある。戦後日本の総選挙における男女別の候補者数を見ると、現在に至るまで一貫して、候補者の大半を男性が占めていることが分かる。直近の2017年の総選挙でも、立候補した1,180人のうち、女性の候補者は209人にすぎない。つまり、立候補の段階で女性の割合は極めて低い以上、仮に女性が男性と同じ割合で当選したとしても、当選者における女性議員の割合は極めて低くなる。有権者がどのように投票しようとも、女性が選挙に立候補していないことこそが、日本において女性議員が少ないことの決定的な原因なのである。

ちなみに、一度選挙に出てしまえば、女性候補者は男性候補者と互角に戦える。近年の日本の国政選挙と地方選挙における、候補者と当選者に占める女性の割合を比較すると、総選挙以外の選挙においては、候補者と当選者の女性比率はほとんど変わらない。

日本の選挙では、投票が始まる前の段階で、有権者が選べる女性の数が極めて少なくなっている。なぜ、女性候補者はこれほど少ないのだろうか。

一つには、日本に限らず、政治家を志す女性の数が男性に比べて少ないという問題がある。ある時期までは、どの国でも女性の社会進出が進んでおらず、政治

家になるための足がかりとなる職業に就く女性も限られていた。そのため、経済発展を通じて教育が普及すれば、女性議員も増えるだろうという、やや楽観的な議論が有力だったこともある。ところが、各国で女性の社会進出が進む中、政治家になろうとする女性の数は多くの国においていまだに限られていることが分かってきた。

この問題については、ジェニファー・ローレスとリチャード・フォックスがアメリカで実施した大規模な社会調査が知られている。2001年、弁護士、経営者、大学教授、政治活動家など、アメリカで政治家の主な供給源となっている職業の男女数千人を対象に行われたこの調査によれば、男性(1,870人)は59%が立候補を考え、そのうちの20%が実際に何らかの公選職に立候補した。これに対して、女性(1,653人)で立候補を考えたことがあるのは43%、実際に立候補したのはそのうちの15%にすぎない。立候補した人数を比べると、男性は216人、女性は105人であった。

この男女格差の原因について調べてみると、女性と男性の違いは子どもの頃から始まっていた。女性は、親と政治の話をしたり、立候補を勧められたりすることが男性に比べて少なく、成人後も家族や友人から立候補を促される経験が少なかった。そして、自分の能力に自信を持ってない女性ほど、男性に比べて立候補を思いとどまる傾向が強かったという。これは、社会化を通じてジェンダー規範が植えつけられるメカニズムを示している。

男女の動機の格差は、政治活動のコストに由来する部分もある。多くの有権者は、女性候補者に偏見を抱く以前に、そもそも政治に対する関心が薄い。このため、政策争点に関する情報を集めたり、候補者が掲げる政策を知ろうとしたりする努力を行わない。このような消極的な有権者を前にすると、候補者に求められるのは、選挙活動を通じて有権者との接触を繰り返し、好感度を高める戦略である。テレビや広告などを通じた間接的な選挙運動を行うにせよ、選挙区の支持者の冠婚葬祭への参加などを通じた直接的な選挙運動を行うにせよ、多くの時間とリソースが必要になる。ジェンダーの視点から見た場合、このことは特に女性候補者に不利に作用する。女性は家事労働を担うことが期待され、時には家族の協力が得にくく、当選するのに必要な支持基盤を築きにくいからである。

だが、日本の選挙で女性候補者が少なくなるメカニズムは、おそらくアメリカとは異なっているだろう。アメリカの場合、二大政党の候補者は党本部からの資金的な支援をほとんど受けることがないため、弁護士や経営者など、個人的に多くのリソースや人脈を持つ者が有利になる。従って、これらの職業に就く女性が増えれば、女性候補者が増加するという想定が成り立ち得る。これに対して、日本の候補者は地方議員や議員秘書、官僚、労働組合など、政党の設定したキャリアパスを通じて擁立されることが多い。このキャリアパスを通る候補者は男性の割合が圧倒的に高く、女性候補者にはスポーツ選手やタレントのように知名度への期待によって擁立される事例が目立つ。つまり、日本の選挙で女性候補者が少ない原因を考えるには、有権者のジェンダー・バイアスや、立候補する意欲の男女差とは別に、政党が女性候補者をリクルートしてこなかった原因を探らなければならない。

〔中略〕

なぜ、ピーチ姫は自力でクッパ城から脱出しなかったのだろうか。

20世紀を代表するテレビゲームとして世界的に知られる任天堂の「スーパーマリオブラザーズ」(1985年)の物語は、極めて伝統的な男女の性別役割分業観に基づいている。このゲームの主人公であるマリオという名の男性は、その行く手に立ちはだかる様々な魔物たちを倒しながら、魔王クッパの居城に囚われた王女ピーチ姫を救出するのである。ピーチ姫が、ゲームの冒頭でクッパに連れ去られた後、マリオが助けに来るまで何をしていたのかは、ほとんど描かれていない。

しかし、別の物語もあり得たのではないか。カナダの評論家アニータ・サーキージャンは、そう問いかける。例えば、同じように王女が誘拐されることから始まる物語を作るにしても、その王女はただいたずらに救出を待つ必要はない。なかなか男性が助けに来ないことに業を煮やした王女が隙を見て自ら城を脱出する、というシナリオを考えることもできる。あるいは、追っ手を逃れながら冒険を重ねて腕を磨いた王女が、最後には自ら敵の親玉を倒して王国の平和を取り戻す、という筋書きに沿ったゲームを作ることも考えられる。

サーキー吉安によれば、ピーチ姫のような、「囚われの姫君(damsel in distress)」とでも呼ぶべき役割を果たす女性キャラクターは、男性の主人公を動機づけるための存在として、「スーパーマリオブラザーズ」以後の数々のゲームの中で用いられてきた。ピーチ姫は、マリオが成長するためのトロフィーであって、決して主人公になることはない。「家父長制のゲームにおいて、女性は男性の相手チームですらない。男性たちが取り合うボールなのだ」と彼女は言う。2010年頃から、自らの主催するウェブサイト [feministfrequency.com](http://feministfrequency.com) でテレビゲームに関する批評を発表し始めたサーキー吉安は、それまで名作と言われてきた数々の作品に潜むジェンダー・バイアスを指摘し、注目を集めるようになった。

サーキー吉安の名を一躍有名にしたのは、2014年の夏に起きた、通称「ゲーマーゲート」と呼ばれる事件であろう。彼女の批評に腹を立てたゲーム愛好家の男性たちが、インターネット上で彼女に対する攻撃を開始したのである。この事件では、サーキー吉安を含め、ゲーム業界の慣行に対してフェミニズムの立場から批判を展開していた数人の女性たちが執拗な誹謗中傷のターゲットとなり、彼女たちの個人情報インターネット上で晒されただけでなく、最後には殺害予告を受ける状況にまで発展した。

この一件が示すように、社会の主流派とは違う視点から世界を見る人は、時に激しい敵意の対象となる。ゲーマーゲート事件を起こした男性たちは、自分たちの好きなゲームを批判されたことが、よほど気に食わなかったのであろう。彼らにとって、サーキー吉安は暴力を用いてでも排除すべき敵であった。

だが、サーキー吉安は、決してテレビゲームの敵ではない。むしろ、彼女は幼い頃から数えきれないほどのゲームをプレイし続けてきた「オタク」であり、他の誰にも負けないほどテレビゲームを愛してきた。むしろ、そうだからこそ、彼女はあえてゲーム業界の男性優位の慣行を批判する。「ゲームを楽しみながら、同時にその問題点を批判することは、可能であるだけでなく、必要なことだ」と彼女は言う。

政治学に対するフェミニズムの批判についても、同じことが言えるのではない。フェミニストは、政治学の敵ではない。ジェンダーの視点に基づいて標準的

な政治学の学説を見直す試みは、時に社会の主流派である男性に対して不快感を与え、時にその敵意の対象となってきた。だが、その批判は政治学という学問に対する憎しみに基づいて行われるのではない。むしろそれは、政治学をもっと豊かな学問にしたいと願うからこそ行われてきた。少なくとも、筆者はそうに理解している。

誰にとっても、自分とは違う角度から世界を捉える視点に接することは、新鮮な驚きをもたらすに違いない。ジェンダーの視点を導入すると、これまでは見えなかった男女の不平等が浮き彫りになる。今までは民主的に見えていた日本の政治が、あまり民主的に見えなくなる。男性として、極めて標準的な、「主流派」の政治学の伝統の中で育った筆者にとって、フェミニズムとの出会いは、そうした驚きの連続であった。

想像もしない角度から自分の世界観を覆されることは、反省を迫られる体験であると同時に、刺激に満ちた体験でもあった。次に、何が出てくるのか。新しい本を読むたびに、未知の発見があった。何よりそれは、自分が今までジェンダーとは関係がないと考えていた数多くのことが、実はジェンダーと密接に関係していることを知るきっかけとなった。

例えば、国際政治における外交交渉を担う外交官の男性たちの伝記や自伝には、その妻のエピソードが登場することが多い。この種のエピソードにおいて、妻たちはパーティーで社交的に振る舞い、それによって夫の評判を高める役割を果たす。これは、今日でも極めて一般的な外交のイメージであるが、考えてみれば不思議なことではないだろうか。「国益」を追求することを旨とするはずの冷徹な男性たちの駆け引きが、実際には女性たちの無償労働を必要としていることを意味するのだから。

1945年8月、米軍が広島と長崎に原子爆弾を投下したことの是非をめぐっては、今日でも論争が続いている。日本側の被爆者とその遺族らから見れば、原爆投下は非人道的な殺戮であるのに対して、アメリカでは原爆投下が戦争終結に必要だったという議論が軍人を中心にいまだ根強い。この論争の中で長く忘却されてきたのは、女性の役割である。原子爆弾を製造するためのマンハッタン計画を主導した科学者たちの大半は男性であったが、核物質を抽出する危険な作業を

担った労働者の多くは女性であった。こうした女性たちの役割は近年のアメリカで再び注目されつつある。

一度、ジェンダーの視点をあらゆることに適用できることが分かると、世界の見え方が違ってくる。そして、どのような政治現象を見ても、「では、女性はどこにいて、何をしているのだろうか」「あの政治家が行った選択は、その人が男性だったことと、関係があるのだろうか」などと問いかける習慣が身に付いてくる。

ジェンダーの視点から眺めることで、世界の見え方がこれほど変わるのなら<sup>2</sup>ば、そのことを最初から知っておきたかった。自由主義やマルクス主義があらゆる政治現象を説明する道具立てを備えているのと同じように、フェミニズムもあらゆる政治現象を説明する論理を持っているということを、知っておきたかった。だからこそ、これから政治学を学び始める人には、そのことを早い段階で知っておいてもらいたい。

社会の主流派とは異なる視点を政治学に導入することは、政治の捉え方を大きく変える。それによって、従来は問われてこなかった様々な問題が浮上し、それを解くための様々な回答が提示される。その過程で、政治学は学問としてより豊かになるだろう。ジェンダーの視点を導入することで、これまで社会の主流派としての男性の視点から描かれてきた政治の風景は、しばしば劇的に変貌する。政治の世界は常に誰も予想しない形で変転してきた。どこかで常に、主流派とは異なる視点から世界を見ている人々が、現状に対する異議申し立てを行っている。

多様なアイデンティティを持つ人々の意見がぶつかりあう問題においては、対立する当事者たちの間で妥協が難しい場合も多い。そのような状況において、自分の視点の正しさを力説し、相手を論駁しても、おそらく得られるものは少ないだろう。むしろ、自分の視点から見える世界が限られていることを認めた上で、他の視点から見た世界のあり方を踏まえ、粘り強く対話を続けるしかないのではないだろうか。

2 以下の文章は、内田由紀子『これからの幸福について—文化的幸福観のすすめ』(新曜社、2020 年)の一部を改変したものである。これを読んで、以下の問に答えなさい。

問 下線部「日本においては、バランス志向に根ざした集合的幸福観と、持続可能な幸福につながる智恵が存在している」という著者の考えについて、自身の具体的な経験を混じえて 1,000 字以内で批評せよ。

幸福はどのように定義できるだろうか。主観的な幸福感(Happiness, subjective well-being)は、「喜びや満足などを含んだ、ポジティブな感情・感覚」として定義することができる。美味しいものを食べたときや、気持ちの良い温泉に入って一息つき、「ああ、幸せ!」と感じるときのような状態である。

一時的な感情状態だけではなく、自分の状態や人生に対する評価や心理的安寧(well-being)も主観的幸福感には含まれる。「自分のこれまでの人生は幸せなものであったなあ」と感じることや、「家族の幸せが私の幸せ」というようなときに使われる「幸せ」は、より持続的な、人生や日常に対する評価を含んだ概念である。

辞書において幸福はどのように定義されているのだろうか。英語辞書での「幸福」定義の変遷を検討している研究によると、より古い定義においては幸福を「運の良さ」とする考えがみられていた。しかし、近代化とともに幸福は「個人が自力で獲得する」あるいは「個人が感じるもの」とする要素が強くなったという。そして 1961 年の Webster's Unabridged Dictionary において、幸福は「持続的な安寧状態を指し、単に満足を感じているような状況から、人生における深い喜びに至るまでの範囲を含み、その持続性が自然にわきあがるようなもの」として定義されるようになった。現在、主に北米を中心に行われてきた心理学における幸福感研究においては、個人の長期的なポジティブ感情と人生における評価の双方で定義されている。

また、主観的幸福感を、短期的な「瞬間的・感覚的喜び」あるいは「快感情」(これを古代ギリシャの「快楽主義：ヘドニズム」からヘドニアという)と、長期的な視点でみて、人生における「意味」や「方向性」を感じることを(これをアリストテレ

スが使った用語から、ユーダイモニアという)とに分けて議論することがある。簡単に言えばヘドニアは快楽主義、ユーダイモニアは生きがい追求主義といえるだろう。ヘドニアは日々の幸せを感じていること、ユーダイモニアは社会の中でつながりや貢献意識、自分の人生に何らかの方向性を感じるかどうかという程度で測定される。ユーダイモニアについてはリフが「自己受容」「個人の成長」「他者との良い関係性」「自律性」「自分の周りにある環境を制御すること」「人生における目的意識」として定義している。また、ヘドニアはディーナーのいう「ポジティブ感情」「ネガティブ感情」「人生の満足」として定義されることが多い(が、人生の満足はよりユーダイモニア的であるともいえる)。

この二つは個人差としてみると、高く相関することが知られている。たとえば毎日快感情を感じている人ほど、人生における意味も感じているということになる。しかしこの二つは異なる概念でもある。快感情は人生の意味にはつながらないような、刹那的な場面(たとえば普段は行かないのにたまたま行ったギャンブルに興じるなど)で瞬間的に感じられることがある。また、人生の意味は時には快楽からは遠いような、日々の苦しい努力の上に見出されることもある。ユーダイモニアのほうが、周囲にいる他者や集団にとってはメリットがあることが大きいともされている。時にヘドニアを追いかけることは、周りを省みない状況ともなるからである。

総じて、ヘドニアが経験に即した幸福感情であるのに対し、ユーダイモニアはより広い視点で人に生きる意義や幸福を感じさせる機能をもつ評価的幸福であるといえる。大きな災害の報道に接した時にヘドニア的には悲しみが増しネガティブな感情が生じるが、そうした中で新たな未来に向かって自分の人生を見直し再評価しようとすることでユーダイモニアが上昇することもある。

人々はヘドニアとユーダイモニアの両方を追い求めるものであり、その「良いバランス」が重要であるとされている。ヘドニアは現在の気分を良くするが、あまりにそればかりを追い求めると、時にはつらい気持ちを味わうことも必要となるような、人生の意義を得るための努力を回避することにつながってしまう。一方で将来のユーダイモニアのために日々があまりにつらいことばかりだとすれば、努力を継続するのは難しくなってしまう。

一方、社会学や経済学では、よりマクロな視点に関心がもたれる。そして、幸福な共同体・社会(国)とはどのようなものかという研究が行われている。国の裕福さや福祉状態などを測定し、「豊かさ」を「幸福さ」と定義づけて検討がなされてきた。GDPなどの経済指標も、ある種マクロな幸福度指標の一つに位置づけることができるかもしれない。

マクロ指標と、主観的で個人的な経験としての幸福との間には、その定義に一定の乖離が存在しているのでそのギャップを埋めようとするときには、それなりの「理屈」が必要になる。最大多数の最大幸福(ベンサム)の定義に基づくならば、幸福な個人がたくさん存在する社会は幸福な社会ということができる。逆に国全体が豊かならばそこに住む人々も豊かである(にちがいない/べきだ)と結論づけることも可能であろう。

一方で実際の社会と個人の間には、単純な関係性ばかりが存在するわけではない。個人にとっては幸福や快楽に結びつく行動が、社会全体にとっては必ずしも良い状態をもたらさないこともある。たとえば自分が楽をするために公共の適当なところにゴミを投棄すれば、その個人にとっては目の前からゴミがなくなったという望ましい状態になるかもしれないが、それは環境に悪影響を与えることになりかねず、そのことは翻って自分の周囲の状態を悪化させ、自らが住みにくい環境を作ってしまう、結果として幸福を損ねることにもつながる。あるいは逆に、公共や集団の規範や圧力のために、個人の思いが犠牲になってしまう事象も存在している。たとえば地域活動の参加を義務づけられた場合には、他にやりたいことがあるという希望は満たされないことだろう。

このように、個人と集合の幸福の問題はなかなか一筋縄ではいかない。では、日本社会、そして世界の幸福の状態は、どのようなものであろうか。

幸福についての多くの議論は「お金」や「物質」と切り離せない。あなたはお金持ちになりたい(あるいはお金持ちでよかった)だろうか。あるいはもっと裕福な国や地域に生まれたかった(あるいは生まれてよかった)と感じているだろうか。もしお金持ちになりたいとすれば、それはなぜだろう? お金によって手に入るものにより、究極的には幸せになれると考えているからではないだろうか。たとえば最近の傾向として、先進国では子育てに多額のお金をかける傾向があることが

知られている。これはお金をかけて「子どもに投資」し、良い教育を受けさせ、あるいは良い学校に通えるような地域に住むことが、子どもの将来の社会的地位や経済状態を保証し、それが子どもの「幸福」につながると考えるからに他ならない。

それでは実際に、経済的に豊かな国は幸福なのだろうか。国単位で考えると、お金と幸福は、ある程度「イコール」とみなすことができるという考え方が主流である。つまり、豊かな国＝幸せな国、という定義である。この考えに基づけば、幸福の指標はごく単純に、GDP(国内総生産)を用いればよいということになる。

幸せイコールお金という考え方は、とくに経済的には苦しい地域や国において、より顕著になる傾向がある。日本においてもとくに高度経済成長の時代には、経済的な豊かさが心の豊かさと結びつけられがちであった。生活が苦しいときには、まずは目に見える物質的豊かさがなければ幸せになれないと考える傾向をもつのは、ある意味当たり前の人間の本性といえるのかもしれない。マズローの達成水準に従うならば、人にとっては、基本的な欲求である「生理的欲求」「安全の欲求」を満たすことが必要である。そこが満たされてこそより高次の欲求である社会関与や自己実現の充足に向かうことができる。基本的な欲求を満たすためには一定の経済水準が必要になるだろう。実際、住環境のインフラや安全性が失われると、私たちはなかなか「心豊か」ではいられないだろう。これは、「必要最低限の経済的基盤」の重要性を意味する。

戦後間もない頃の日本においては「三種の神器」、さらに高度経済成長期には「新・三種の神器」など、インフラや道具が調い、暮らしが便利になっていくことが幸せな生活の基本とされていた。たしかにそのことで余裕が生まれ、さまざまな家事労働の煩雑さから解放されていった。こうした目に見える豊かさは、幸せをもたらしていくという手応えがたしかにあったにちがいない。国が安定し成長するとともに、マズローの言うところの人々の生理的欲求や安全の欲求が満たされていった時期でもあったのだ。

一方で、社会的な所属意識や自己実現が、経済的に豊かになってからしか問われない価値だというのは言い過ぎであろう。人間が歴史的に長らく集団で生活し

てきたという事実を鑑みると、他者から承認されたい、あるいは尊敬され、大切にされたいという欲求は、たとえ生活が苦しい時代あるいは場所においても存在していると思われる。

また、経済イコール幸せという図式には限界もある。たとえば「お金持ちになればなるほど、心豊かに暮らせるのか？」という問いに対しては、YES とは言い切れないということがデータでも示されている。経済状況が良くなることで、新たな社会問題がもたらされることがあるからだ。たとえばインフラサービスと利便性がある都市に人々の職場や住居が集中し、人口密度に偏りが生まれてしまう。その結果として、とくに都市部で人々の生活が自然から切り離され、あるいは通勤・通学に多くの時間が割かれ、余暇の楽しみを享受できなくなることもある。都市の拡大と都市生活者の大量消費に伴う、燃料や資源の持続可能性の問題も深刻になってしまう。こう考えると、お金のある国イコール豊かで幸せな国、と言い切ってしまうことは難しい。経済成長の時代が終わりにさしかかろうとしている今、幸福感の再定義が問われているのではないだろうか。

ブータンは「幸せの国」として名をはせているが、経済的には世界のなかの最貧国に位置づけられている。国民もその状態をよしとはしておらず、経済的自立を目指している。一方で経済的豊かさと心の豊かさは必ずしもイコールでないことも意識されている。心豊かに暮らすためには、森林とのつながりなど、経済以外の条件も（経済開発の犠牲にされずに）整っている必要があるという視点から、政策的意思決定がなされている。つまりブータンからは、先進諸国のようになれば本当に国民が幸せになるのか？という問いかけが提示されているのだ。実際、現在では「経済成長ノットイコール幸せ」という考え方が再評価されつつあり、ブータンの「GDP より GNH (国内総生産より国民総幸福)」という試みにも注目が集まるようになった。

〔中略〕

筆者は何度かブータンを訪問し、国民総幸福度 (Gross National Happiness: GNH) とは何かについて直接話を聞く機会を得ている。「幸福の国」として注目さ

れていたブータンであるが、訪れてみるとなかなか奥が深くて驚かされた。

ブータンは、インドと中国にはさまれた非常に小さな国で、面積は九州ぐらいで人口が70万人、イメージとしては島根県民が九州全体に散らばって暮らしている感じだという。仏教国で、農業人口が9割。後発開発途上国で、観光業と、ヒマラヤ山脈の高低差のあるブータンの地形を活かした水力発電に力をいれている。インドが最大貿易相手国で、電力をインドに売ったり、逆に工業製品はインドから輸入している。医療費と教育費は無料。

ブータンの幸福観は、いわゆる北米系の「獲得志向」の幸福観とはとても異なっている。もちろんブータンでも良い教育を受けること、あるいは自尊心を高くすること、労働意欲や経済状態は大切にされている。しかし、最も重視されているのは感謝の気持ちと充足感である。両親、先祖、自然、動物たち、土地に感謝をしながら、日常のなかで充足感を感じていることをブータンの人たちは大切にしている。

ブータンは人々が「幸福の国」という言葉から想像するような、いわゆる「桃源郷」というわけではない。経済的には最貧国のなかに含まれるし、地方部ではインフラが整っていないところもある。しかし人々は誇りと他者への信頼をもって暮らしていることが伝わってくる。お寺を訪れると老若男女が長い時間座って祈りを捧げ、学校を訪れると子どもたちが楽しそうにかつ一生懸命に勉強をしている。畑では、牛とともに農業者が作業をしている。町のなかでは犬が昼間に寝ており、辻では子連れの大人たちが井戸端会議をしている。森の色が深く、山の谷間に町がある。時間の流れはあくまでゆったりしている。予定されていたプログラム通りに事が進まないこともしょっちゅうあるが、不思議といらいらとはさせられない。ブータンには「輪廻転生」の思想が根づいているからか、なんとなく「悠久な」時間の流れがあるように思われる。現世のなかで必ずしも成功しなくても、来世でうまくいくかもしれないという、長い時間のなかでゆったりと幸せを考えている。自分の幸せが目の前にいる誰かだけではなくて、祖先や、あるいはこれから自分が会うことのないかもしれない何世代か後の子孫ともつながっており、幸せというものは自然や他者との関わりのなかで実現されるという感覚が自ずと伝わってくる。

日本の農業でよく問題になるのが鳥獣害であり、サルやシカに農作物を荒らされることへの対策がとられることがある。ブータンにももちろん鳥獣害があり、しょっちゅう畑が荒らされるようだが、ブータンの人に聞くと絶対に「鳥獣害」という言葉を使わないようにしているという。「害だ」と言ってしまうと、動物と人間の間に線が引かれ、こちらは良いもの、あちらは悪いものというふうにしてしまう。しかし、ブータンでは動物と人々が自然をともに共有しながら暮らしており、逆に動物が暮らしているところに人間がお邪魔してしまっているのかもしれないという感覚があるらしい。それゆえに「鳥獣害」という言葉を公的な文書で使わないようにしているというのである。

意思決定に関わるリーダーたちと話をすると、他の国の様子を分析したうえで政策決定を行っていることがわかる。ブータンは経済的な自立を目標にする一方で、ブータン国民の心の豊かさを支える自然環境や文化伝統の保全を重要視しており、経済発展が環境・文化要因の保護とバランスをとって行われるかどうかという評価による意思決定を行っている。つまりブータンは「幸福の国」というよりは「幸福を目指した国づくり」を行っている国、と表現したほうが正しいだろう。そのための理念である GNH をさまざまな場面で通底させ、人々と共有しようとしている。

GNH は、第四代国王が 1970 年代に「ブータンは GDP より GNH を大切にする国にしたい」といったことに始まるといわれている。ブータンは前述のとおり、インドと中国という二つの大国にはさまれた、小さな国である。しかし GNH 政策は、小さな国であるブータンが、世界にその名を知らしめる大きなきっかけになったのだ。経済成長を目指しても人々が幸せにならないのであれば、経済成長というのはもしかすると緩やかでもいいのかもしれない、逆に経済成長することで失ってしまうものを大事にしたほうがいいのかというようなことをブータンは発信している。幸福を考える政策立案をし、そのために指標を用いて測定と分析を行うというのはたしかにかなり画期的である。各省庁から提案された政策を、GNH の観点から評価し、この観点に見合わない計画だったときには却下されることもある。山を切り開いて、バイパス道路をつくってしまえば隣町に行くのは楽になるけれども、それをやってしまうと自然が守られなくなり、結果と

して人々の幸福を減じてしまうことになるかもしれない、それならば道路はつくりたくないという決定がなされたこともある。

ブータンを訪れたときに印象深かったのは、「幸福を感じる力」への志向性である。とくにブータン仏教と幸福観の関わりは無視できない。祈りや瞑想の時間を設けることが日常的に行われており、人々は「足るを知る」の精神を重要視している。それゆえ、Happinessという言葉を用いているが、本当は【幸せ】ではなく【充足】という意味に近い。

一方でブータンにも変化が訪れている。首都ティンブーは急速に都市化し、農村の若者が離農して首都にやってくることが増えた。しかしティンブーは都市化したとはいえ、小さな町であり、当然、多くの労働者を抱えきれだけのキャパシティがない。ゆえにティンブーでは若者の失業が問題になっている。また、スマートフォンやインターネットなども普及しはじめ、それに伴う価値観や意識の変化もある。こうしたなか、ブータンの幸福観がどのように変化していくのか、世界が注目している。

翻って、日本の幸福はこれからどうなっていくのだろうか。さまざまな社会問題に対しては政治や経済の方策で何とかしてほしいという声が大きいのと思うが、果たして政治的に決定される制度やしくみが変わっただけで、これらの問題は解決するのだろうか。私たちが日常生活の中で考えるべきことはないのだろうか。

制度が変われば意識は変わる、そのようにして日本は明治維新に代表されるような改革に取り組んできた。しかし、日本に新しく入ってきたグローバリゼーションは、私たちの意識を大きく変えるには至っていない。実は人の価値観には根強く残る部分もあるのではないかと思う。

個人の幸福を大切に考える、という志向性は、歴史的に見ても長く存在していたものではない。個人の幸せは二の次で、集団が生き残るために必死にならなくてはならないという時代が長く続いていたのだ。もちろんそうした中でも特権を持つ一部の人たちには自分たちの幸福や満足を充足させる余力を持っていたし、ある意味他者の幸せを搾取していた。時代は移り変わり、ある程度安定した社会状態が実現されれば、より多くの個人が幸せについて考える余地ができるようになった。しかしいまだに「個人の幸せ」は日本の中では難しい概念である。

離婚や転職などのことを例に挙げてみよう。自分がつらい思いをしてまで婚姻関係を続ける、あるいは同じ職場にとどまることは、「個人の幸せ」の観点から見ればある意味非合理的に思われる。しかしながら日本では、自分以外の他者に迷惑がかかる意思決定を避けようとする傾向は強い。それゆえに個人の幸せを守る選択をするときには罪悪感を抱くことがあるし、また、個人の幸せを追求する人に対して他者からはあまり良い感情が抱かれなないことがある。逆に個人の幸せを犠牲にして他者や社会に尽くした人については高く評価される傾向がある。そうすると結局個人の幸せは「幸せ」にはなり得ない。

こうした状態は価値観として長く引き継がれており、頑固に根を張ってきた。日本企業の長時間労働の現状を改革しようとしてもなかなかうまくいかないのは一部こうした価値観とも関連している。長時間頑張っている人、会社のために個人の時間を持つことを犠牲にしてきた人、そういうことを評価する現状がある以上、「私はそうしません」とは言いづらい。

また、日本の社会においては「せねばならない」ルールのほうが先行し、それらを適切に処理していれば「安全だ」という意識が強い。もちろんそれによって日本はかなり世界的にも信頼されるような事物を作り出すことに成功してきたともいえるのだが。

近年文化差を分析する概念として“タイトネス・ルーズネス”が注目されている。社会の「固さ、ゆるさ」ともいえるもので、タイトな文化には強い規範があり、そこからの逸脱に対して寛容でないという特徴がある。ルーズな文化は規範が緩く、そこからの逸脱に対しても寛容である。33カ国を比較した研究によると、よりタイトな文化を持つのはアジアに多く(インド、パキスタン、日本、マレーシア、シンガポール、韓国)、ルーズな文化は南米・ヨーロッパの一部(ブラジル、ハンガリー、オランダなど)である。タイトネスが強すぎても、ルーズネスが強すぎても、幸福度は低くなり、寿命なども短くなることが示されている。日本は数値的にいえば世界の中で極端にタイトというわけではないが、とくに集団(学校、会社、家族、地域)場面において、自分たちにとってより身近かつ直接的な交流が深い単位になると、規範意識の強さと相手からの不評を恐れる気持ちは強くなる。

タイトな規範をルーズにするのは難しくとも、もう少し自由な意識を持ち、他者を規範からの逸脱による減点法でジャッジするのではなく、やってくれたことへの加点法で感謝を示すことができるならば、もう少し幸福感のあり方も変わってくるのではないだろうか。

しかしながら、個人の幸せが、他者の幸せを搾取せずに協調的に成立することも大事な要件である。おそらく日本の協調的な幸福は、他者との調和を重視することで、天災などの困難を乗り越え、周囲と助け合うために自分を律する、そういう機能をもって受け継がれてきた。個人ばかりに目を向けてそれが競争的な形で相手を打ち負かし、自らが多くの取り分を得ようとするようなものでは、社会は過度に競争的になり、安定した幸福は得られない。個人の幸せの行きつく先が、足りない部分を満たし続けようとしてしまう快樂主義的なものになってしまつては持続的な幸福は見込めない。個人が生きる意味や価値を感じられるような幸福を実感しながら、それを支える社会・集合とバランスを持っていくことは、現在日本における幸福について考えるうえで極めて重要なことなのではないだろうか。

私たちの幸福を支えるのは、自然環境、経済環境、社会関係など、多岐にわたる。一方でこうしたものは常に安定的に存在しているわけではない。安定的・持続的に人の幸福を支える要因を維持させるためには、努力も必要になってくる。

一つは、地球資源の分配にまつわる、長期的ビジョンの構築が必要であろう。もしも現時点での近視眼的かつローカルな幸福ばかりを追い求めるとすれば、刹那的な意思決定が繰り返され、周囲にある環境への評価には注意が払われにくくなり、公共財問題が発生しやすくなる。それを回避するためには、個人が自分の欲求の充足のみを幸福の拠り所とするのではなく、長期的で広い視点に立った関係思考が必要になる。個人の幸福追求モデルは、個人間の競争と達成がひいては社会全体の利益を生み出すという資本主義モデルと連動したものであるが、これがうまく循環する条件は、個人間の競争がマクロ環境へのダメージによる共貧状態をもたらさないこと(資源が豊富にあると想定される状態)である。しかし地球資源を考慮すると、この条件が成立することは非常に稀であろう。

もう一つは、「幸福を感じる力」の育成も必要であろう。経済成長が国民の幸せ

を支えるという理屈が浸透し、経済成長という目標設定がデフォルト化、一定の経済活動の拡大を目指してきた。たしかにそれらは非常に重要ではあるが、「要件がそろっていれば必ず人は幸福を感じる」というものではない。むしろ、一定の要件が満たされていても幸福を感じることができない人は多くいる。ブータンでは、経済発展以外の側面も重視し、文化や精神性あるいは自然環境が失われなことを重視している。そしてこの政策は、発展途上国のみならず先進国を含めた世界各国の一つのロールモデルとして機能しはじめている。

幸福を支える要件と、幸福を感じる力は別物である。時に「要件」の上昇が「感じる力」を削いでしまうこともあり、幸福を感じる力を育てることは簡単なことではない。実際、多くの国は増大する個人の欲求と供給とのバランスをとることに対して成功を収めているとはいいがたい。日本においては、幸福を満たすとされる「要件」は世界的にみても相当に高ランクに位置する。インフラが整い、情報を容易に入手でき、医療設備も整っているとともに、文学やメディアなどの文化も発達している。しかし、幸福を感じる力は衰えているかもしれない。

消費文化においては「個人」の幸福の要件に注意が向けられやすい。実際に、個人の幸福の要件に特化した幸福度指標が世界で普遍的に用いられていくことは、果たして地域固有な自然や文化に基づいた持続可能な社会づくりに資するものであろうか。

持続可能な社会を実現するためには、世代を超えてどのように幸福を受け継ぐのか、また、自分(自分たち)さえよければよいという考えだけではなく、他の地域に暮らす人々との横のつながりや影響を視野に入れる必要がある。日本においては、バランス志向に根ざした集合的幸福観と、持続可能な幸福につながる智慧が存在している。こうしたモデルを日本が国際社会のなかで積極的に提言する役割を担うことが今こそ求められているのではないだろうか。

R-8

受番 験号

解答用紙番号

小論文 0—1

71—0—1

採点記入欄

小論文解答用紙 (教育学部)

4 枚の解答用紙と 4 枚の下書き用紙がある。  
下書き用紙は回収しない。

座番 席号

(下の座席番号欄にも)  
記入すること。

**注意**  
※採点記入欄  
には何も記  
入しないこ  
と。

1

問 1

This is a template for graph paper. It features a grid of dashed lines forming squares. At the top, there are five major tick marks labeled 5, 10, 15, 20, and 25. On the left side, there are five major tick marks, with the second one from the bottom labeled 5. The grid consists of 25 columns and 25 rows of small squares.

※採点欄

R—8      Ⓑ

選拔  
区分

注意

1. この欄の座席番号も必ず記入すること。
2. ※採点表には何も記入しないこと。

解答用紙番号

小論文 0—1

71—0—1

座席番号

10    11    12

※採点表

問題 1-1

0

13 14 15

R—8 ㊦

|      |   |  |  |  |  |  |  |
|------|---|--|--|--|--|--|--|
| 受験番号 | B |  |  |  |  |  |  |
|------|---|--|--|--|--|--|--|

|        |
|--------|
| 解答用紙番号 |
| 小論文0—2 |

71—0—2

採点記入欄

小論文解答用紙（教育学部）

|      |  |  |  |
|------|--|--|--|
| 座席番号 |  |  |  |
|------|--|--|--|

（下の座席番号欄にも記入すること。）

注意  
※採点記入欄には何も記入しないこと。

1 問2

|    |   |    |    |    |    |
|----|---|----|----|----|----|
|    | 5 | 10 | 15 | 20 | 25 |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
| 5  |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
| 10 |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
| 15 |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
| 20 |   |    |    |    |    |

（裏面に続く）

|      |
|------|
| ※採点欄 |
|      |

R—8 ㊦

|      |
|------|
| 選抜区分 |
| B    |

注意

1. この欄の座席番号も必ず記入すること。
2. ※採点表には何も記入しないこと。

|        |
|--------|
| 解答用紙番号 |
| 小論文0—2 |

71—0—2

|      |  |  |
|------|--|--|
| 座席番号 |  |  |
|      |  |  |

10 11 12

|        |  |  |
|--------|--|--|
| ※採点表   |  |  |
| 問題 1-2 |  |  |
|        |  |  |

13 14 15

R—8 ㊦

|      |   |  |  |  |  |  |  |
|------|---|--|--|--|--|--|--|
| 受験番号 | B |  |  |  |  |  |  |
|------|---|--|--|--|--|--|--|

|        |
|--------|
| 解答用紙番号 |
| 小論文0—3 |
| 71—0—3 |

採点記入欄

小論文解答用紙（教育学部）

|      |  |  |  |
|------|--|--|--|
| 座席番号 |  |  |  |
|------|--|--|--|

（下の座席番号欄にも記入すること。）

注意  
※採点記入欄には何も記入しないこと。

2

|    |   |    |    |    |    |
|----|---|----|----|----|----|
|    | 5 | 10 | 15 | 20 | 25 |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
| 5  |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
| 10 |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
| 15 |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
| 20 |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |

解答用紙番号0—4へつづく

R—8 ㊦

|      |
|------|
| 選抜区分 |
| B    |

注意

1. この欄の座席番号も必ず記入すること。
2. ※採点表には何も記入しないこと。

|        |
|--------|
| 解答用紙番号 |
| 小論文0—3 |
| 71—0—3 |

|      |    |    |
|------|----|----|
| 座席番号 |    |    |
|      |    |    |
| 10   | 11 | 12 |

|      |    |    |
|------|----|----|
| ※採点表 |    |    |
| 問題2  |    |    |
| 0    | 0  | 0  |
| 13   | 14 | 15 |

R—8    ㊦

|      |   |  |  |  |  |  |  |
|------|---|--|--|--|--|--|--|
| 受験番号 | B |  |  |  |  |  |  |
|------|---|--|--|--|--|--|--|

|         |
|---------|
| 解答用紙番号  |
| 小論文 0—4 |

71—0—4

採点記入欄

小論文解答用紙（教育学部）

|      |  |  |  |
|------|--|--|--|
| 座席番号 |  |  |  |
|------|--|--|--|

（下の座席番号欄にも記入すること。）

注意  
※採点記入欄には何も記入しないこと。

2 解答用紙番号 0—3 からつづく

|    |   |    |    |    |    |
|----|---|----|----|----|----|
|    | 5 | 10 | 15 | 20 | 25 |
| 25 |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
| 30 |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
| 35 |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
|    |   |    |    |    |    |
| 40 |   |    |    |    |    |

|      |
|------|
| ※採点欄 |
|      |

|      |
|------|
| 選抜区分 |
| B    |

R—8    ㊦

注意

1. この欄の座席番号も必ず記入すること。

2. ※採点表には何も記入しないこと。

|         |
|---------|
| 解答用紙番号  |
| 小論文 0—4 |

71—0—4

|      |  |  |
|------|--|--|
| 座席番号 |  |  |
|      |  |  |

10 11 12

|      |  |  |
|------|--|--|
| ※採点表 |  |  |
| 問題 2 |  |  |
|      |  |  |

13 14 15